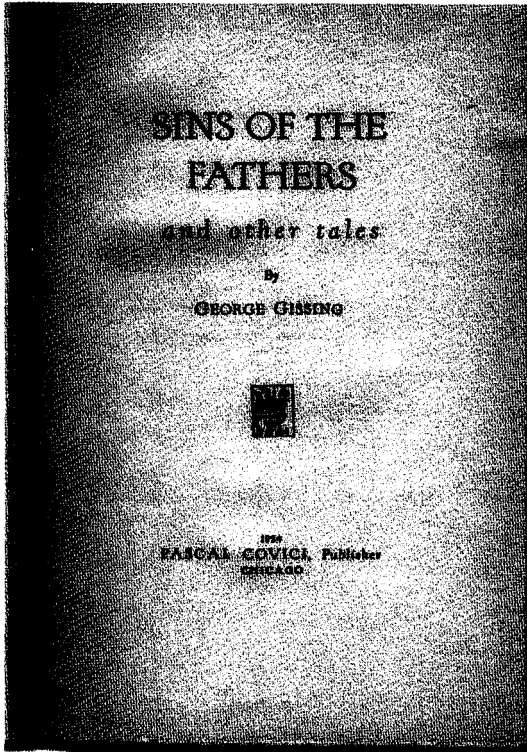


第13章
短篇小説
(The Short Stories)



ギッシングの第1作「父の罪」を収めた
短篇集の初版本 (Chicago: Pascal Covici, 1924)

第1節 ギッシングとシャン・F・ブロック

ロバート・セリグは、『ギッシング・ジャーナル』の1992年10月号、1994年1月号、同年4月号において、ジョージ・ギッシングと北アイルランド出身の小説家シャン・F・ブロック(1865-1935)の意外な関わりを明らかにした。¹北アイルランドといえは、イギリスとの連合維持を主張する住民たちと、イギリスからの独立・アイルランドの統一を主張する住民たちの間で、400年に亘って紛争が続いている土地である。前者は主にイギリスに祖先を持つプロテスタント教徒たちであり、後者は主にアイルランドに祖先を持つカトリック教徒たちである。ブロックの本名はジョン・ウィリアム・ブロックで、北アイルランド・ファーマーナ州(County Fermanagh)のプロテスタントの家庭に生まれたが、むしろ敵対派のカトリック教徒たちに共鳴し、「シャン・F」というカトリックに由来するペンネームを用いて、主に北アイルランドの宗派対立を題材にした小説を書いた。同時にブロックはギッシングの作品にも多大な共感を示し、1903年から1913年にかけて、『シカゴ・イヴニング・ポスト』(*Chicago Evening Post*)のロンドン文芸通信員として、アメリカの読者たちにギッシングの作品と生涯を紹介し続けた。中でも、ブロックが、ギッシングの死後、同紙の1904年1月16日号に寄せた追悼文は、ある意味では、ギッシングの作品の特質を良く表している。

ギッシングを、この上なく陰鬱だが、自分ではそれをまったく意識していないユーモア作家以外の何者かであると見なすことは、イーストエンドのスラム街に花が咲くと思うのと同じことだ。彼は、長年の貧困と苦悩の中で、ロンドンの恐ろしい非人間性を知り尽くし、彼の魂と心を苦しめるものが、彼の作品には表現されていた。(中略)ロンドンの霧の真実味同様、ギッシングの物語の真実味を疑うことはできない。読者は彼の描くみずほらしい住宅街に震えを覚え、彼の描く喜びのない家庭にゾットする。そして彼が描く男性たち、女性たちは、読者が日常生活の中で、ごく身近に、どこでも出会うことがあるかもしれない人間たちである。

ギッシングの作品は、ベッドで読むようなものでも、旅行に持っていくようなものでもない。しかし、彼の作品は明らかに全ての文学愛好家たちによって研究されるべきものであり、ロンドンの幾つかの生活階層を描いたものとして永遠不滅の価値を有していると私は確信する。²

これは、ブロックが、『無階級の人々』(1884)、『三文文士』(1891)等、おもにギッシングの長篇小説について述べた見解であるが、彼の多くの短篇小説

に関しても当てはまる。ギッシングは存命中に新聞、雑誌等に約115の短篇小説を發表し、そのほとんどが本にまとめられ、多くは彼の死後出版されている。その中でも代表的なものが、『人間がらくた文庫』(1898)、『蜘蛛の巣の家』(1906)、『境遇の犠牲者』(1927)、『小話小品集』(1938)である。また、ギッシングはマンチェスターのオーエンズ・カレッジを退学処分となり、単身アメリカに渡り、短篇小説を新聞、雑誌に書き続け生計を立てたが、彼のアメリカ滞在中の作品は『父の罪』(1924)、『ブラウニー』(1931)、『アメリカ時代の埋もれた短篇小説』(1992)のうちに収められている。そしてその他のギッシングの短篇小説集としては、『条件付きの女相続人』(1923)、『ヨークシャーの娘』(1928)、『隨筆と小説』(1970)、『我が初りハーサル』と『我が恋敵の聖職者』(1970)、『造化の戯れ—市役所職員プログデン氏』(1990)などがある。

第2節 19世紀ロンドンの暗部を暴く

ブロックが指摘するように、ギッシングはロンドンの幾つかの生活階層を優れたリアリズムで描いており、そのひとつが労働者階級である。例えば、『境遇の犠牲者』の中の「ひとつの幸せの例」(“One Way of Happiness”)、「ルーとリズ」(“Lou and Liz”)、『小話小品集』の中の「フィービー」(“Phœbe”)、『隨筆と小説』のうちの「ミュートイマーの選択」(“Mutimer's Choice”)などだが、ブロックが上に述べている、ギッシングの作品の陰鬱な特質が顕著に現われたものとして、『人間がらくた文庫』のうちの「静まりかえった日」(“The Day of Silence”)が挙げられる。³

バードン一家は、ロンドンの労働者階級スラム街の屋根裏部屋に暮らしていた。一家の主ソロモン・バードン(Solomon Burden)は波止場で日雇い人夫として働き、バードン夫人は清掃婦をしながら家計の足しを稼いでいた。彼ら夫婦には7歳になる一人息子のビリー(Billy)がいた。時は8月の真夏、太陽がガラガラと照りつけ、肉屋と魚屋からは異臭が漂い、居酒屋からのアルコールの臭いが街全体を覆い、下水溝からは息もできなくなるほどの悪臭が立ち昇っていた。最近、体調を崩しているバードン夫人は、仕事から帰宅するや、熱気で蒸せかえっている狭い屋根裏部屋のベッドに倒れ込むように横たわった。これは、まさにブロックの言う、「卑しい住宅街」と「喜びのない家庭」の典型的描写であり、読者は、それらに「震えを覚え、ゾットする」。翌日は土曜日だというのに、バードン夫人は、貧しい家計を助けるために、

病身を押して働かなければならなかった。夫は、土曜日の仕事は午後1時までで、その後は、友人ジェム・ポロック (Jem Pollock) の誘いに応じて、息子のビリーを連れて、テムズ川にボート遊びに行くことになっていた。

バードン夫人はソロモンに、たとえ彼は泳いでも、息子は絶対泳がせぬようにと強く言った。自由奔放、向こう見ずで、大酒のみのポロックは、ボートの上でソロモンと酒盛りをし、おまけにビリーにまで酒を飲ませ、酩酊させた。酒を飲んだにもかかわらず、最初にポロックが川に入り、次いでソロモンが川に入って泳いだ。そのうえポロックは、ビリーを泳がせようと、ボートから引きずり下ろした。妻から息子だけは泳がせないようにと釘を差されていたソロモンは、驚いて、息子を引き上げるために泳いで引き返した。ビリーは、父親に叱られることを怖れて急いでボートに這い上がろうとした。しかし、ポロックはビリーを水の中に引き戻そうとした。その時、ポロックは体のバランスを崩して、ビリーに覆い被さり、ビリーは溺れた。ソロモンは、慌てて息子の救助に向かったが、酒を飲んでいるために体が動かず、彼自身もまた溺れてしまった。ボートは転覆し、助かったのは、ボートにしがみついて川岸にたどり着いたポロックだけだった。ソロモンの溺死体はその日のうちに見つかったものの、彼の息子の死体はテムズの川底に沈み、岸に上げられたのは3日後だった。この悲劇が起きている間、バードン夫人は、仕事から帰宅していたが、途中で体調が悪くなり、教会の庭のベンチに腰を下ろして休んだ。しかし、彼女は、腹をすかして帰って来るビリーのために早く帰って夕食をこしらえてやらねばと思い、再び腰を上げて家に向かおうとした。すると立ち上がった瞬間、彼女はうずくまるようにベンチに倒れ込み、そのまま息を引き取った。川からひとり這い上がったポロックは、ソロモンとビリーの悲劇をバードン夫人に伝えるために家に向かったが、不在だった。近所の住人に尋ねると、「父と息子が午後早く出かけてからというもの、家族3人はまったく見ていない」との答えだった。その小さな家は静まりかえっていた。

ピエール・クステイヤスは、この作品を“an admirably conducted tragedy of lowly life”と評した。⁴“conduct”には「導く」と「伝える」の意味があるが、ここでは双方の意味を含んでいるように思われる。野卑そのもので、抑制のきかないポロックと、彼の誘惑に簡単に負けてしまうソロモン。彼らの身勝手さの犠牲になるソロモンの妻と子供。悲劇は起るべくして起きた。そして「静まりかえった日」という皮肉なタイトルが悲劇をいっそう強調している。まさに、下層階級の人間が「見事に導かれた」悲劇であり、ギッシング

の筆力によって「見事に伝えられた」悲劇である。この作品における労働者階級の描写は迫真の説得力を持っている。それは、ギッシング自身が、ロンドンのみすぼらしい下宿を転々としながら労働者階級の実態を目の当たりにしたからであろう。ギッシングの長篇小説主人公たちは、多くが、例えば『暁の労働者たち』(1880)のアーサー・ゴールディング (Arthur Golding) や、『ネザー・ワールド』(1889)のシドニー・カークウッド (Sidney Kirkwood) たちのように、労働者階級層の教育啓発に情熱を傾けるが失敗し、挫折する。「静まりかえった日」のポロックとバードンもそのような教育不可能な人物たちであり、この作品もまた、ギッシングの長篇小説同様、19世紀ロンドンの労働者階級の実態を描いたものとして価値がある。

『人間がらくた文庫』のうちのもうひとつの作品「ロー・マテリアル」(“Raw Material”)は、⁵ギッシング自身の結婚の失敗に基づき労働者階級の一面を描いた作品と言えよう。ギッシングはアメリカから帰国後、オーエンズ・カレッジ時代に知り合った売春婦メアリアン・ヘレン・ハリソンとロンドンで暮らし始め、まもなく結婚し、彼女を必死に更正させようとする。しかし、彼女の放蕩、飲酒癖はまったく直らず、30歳の若さで命を落とす。

「ロー・マテリアル」の主人公はミニー (Minnie) という若い娘で、彼女は、新婚のプール夫妻 (Mr and Mrs Pool) が出した「お手伝いさん募集」の広告を見て、彼らの家に雇って欲しいとやって来た。夫人は、ミニーの労働者階級訛り丸出しの英語と、ほら吹きめいた話し振りにやや戸惑ったが、彼女を雇うことを決意した。しかし、身を粉にして働きます、毎朝6時には必ず起きます、晩方の外出はしませんという誓いと裏腹に、ミニーは家事はなにひとつできず、頻繁に夜間外出を重ね、朝は遅くまで寝ていた。困惑した夫人は夫に相談すると、彼は、ミニーのことはまだ「未熟な人間」“raw material” (186) だと思っておまえが頑張って良いお手伝いさんに育ててくれ、おまえならきっとできる、と言うのだった。しかしミニーに改善の兆しはいつにも見られず、ある日の深夜、酒に酔って呂律が回らない状態で帰宅するに及んで、夫婦はついに堪忍袋の緒が切れ、彼女を解雇した。それから半年後のある日の夜、プール氏が仕事から帰宅中、ひとりの化粧が濃い女性が彼に話しかけてきた。彼はそれがミニーだと気づき、彼女もまた相手がプール氏だと分かった、背を向けて遠ざかった。

そして物語は、ミニーはもはや「未加工品」“raw material”ではなく「完成した一個の商品」“a finished article of commerce”であった、という一文(190)で終わる。“Raw Material”というタイトルに「未熟な人間」、「未加工品」と

いう二重の意味を含ませ、「静まりかえった日」同様、タイトルが作品の興味を増している作品である。

次に、労働者階級以外にギッシングが描いたロンドンの生活階層を紹介したい。『境遇の犠牲者』のうちの「時計塔の明かり」(“The Light on the Tower”)は、⁶ ロンドンに住むひとりの虚栄心に満ちた野心家の非業の死を描き、ブロックの言う「ロンドンの恐ろしい非人間性」をえぐり出している。

ロバート・フリートウッド (Robert Fleetwood) は、保守党を支持する裕福な商人の長男として生まれたが、父親の意に背いて1886年のイギリス国会選挙に自由党から立候補し、当選した。さらに父親を激怒させたことに、彼は、資産家の女性ミス・ハリリー (Miss Halley) との婚約を破棄し、メアリーという貧しい女性と結婚した。そして皮肉なことに、彼の弟のトーマスがミス・ハリリーと結婚することになり、父親はロバートを勘当し、トーマスにほぼ全財産を譲った。ロバートは政治家として出世をもくろんだものの、半年後に国会は解散し、出直し選挙に立候補したが、あえなく落選した。彼の生活は乱れ、彼の周りには、食事と酒をたかり、彼から何かを得ようとする寄生虫のような男たちがたむろし始めた。しかし妻のメアリーはひたすらロバートの再起を信じ、彼に付いて行った。そんな時、ある国会議員の死去により補欠選挙が行われることになった。ロバートは、彼の周りにたむろす男たちとの放蕩により金を使い果たし、選挙資金はゼロに等しい状態だった。彼は弟のトーマスに手紙で資金援助を依頼したが、「一円たりとも貸せない」(117) とのつれない返事だった。ロバートはメアリーに、援助を断ったのはトーマス自身ではなく、トーマスを尻に敷いている彼の傲慢な妻に違いないと話した。その直後、メアリーはロバートの選挙資金調達のために黙って家を出た。彼は、彼女がトーマスの妻に頭を下げに行ったのでは、という恐ろしい不安にかられた。ほどなくしてメアリーから、「手はずは全て整った」(121) という電報が届いたが、電報の発信地は、トーマス夫妻が住んでいる場所とは違う、ロバートには覚えのない場所だった。彼は、妻が何か別の方法で選挙資金の調達に成功したのだらうと信じ、狂喜した。しかし、彼は、直ぐ出かけるようにという妻の忠告に従わず、その夜は「寄生虫」のうちのひとりと酒盛りをした。そして酩酊して自宅の寝室に戻り、暗がりの中、ガス栓に火をつけて妻からの電報をもう一度読み直そうとした。ふらつく手でガス栓はひねったものの、マッチが見つからなかった。そしてそのままガスを消し忘れて寝入り、ガスが部屋に充満し、悲劇を招来した。実はメアリーはトーマス夫妻のもとに資金援助の依頼に出かけていた。しかし召使いから、

ふたりは別の町の友人宅に行っていると告げられ、彼女はその家を訪れ、屈辱の思いでトーマスの妻に頭を下げた。トーマスの妻は勝ち誇った気分で、資金援助に同意した。そしてメアリーはその町からロバートに電報を打った。彼女はその日のうちに最終列車で帰るつもりだったが、あいにく乗り遅れ、その町の旅館に宿泊し、その間にロバートに悲劇が起きたのだった。

この作品に描かれたロンドンの恐ろしい非人間性—それは、ロバートに寄生虫のようにたかる男たちであり、彼の妻を見下して資金援助に応じる傲慢なトーマスの妻であり、また、ロバートの虚栄心を助長し、彼をますます惨めにし、孤独に陥れる大都会ロンドンである。そしてロバート夫妻の苦悩を深めるのが、この作品のタイトルになった、国会議事堂の「時計塔の明かり」である。夫の墮落に悩むメアリーが、ある晩、家の窓を開けて外を眺めた時、時計塔の明かりがロンドンの街を冷たく照らし出していた。また別の日の夜、酩酊したロバートが、時計塔を指さしながら、国会議員に返り咲く野心を妻に語っていると、その明かりが突然消え、彼は狼狽した。このように時計塔の明かりが、この作品の陰鬱さを伝えるうえで効果を上げている。虚栄心に満ちた人間と、その虚栄心が打ち砕かれる様を描いた他のギッシングの作品として、同じ『人間がらくた文庫』のうちの「煽動者」(“The Firebrand”), 『蜘蛛の巣の家』のうちの「門番小屋の娘」(“A Daughter of the Lodge”)などがある。

「静まりかえった日」, 「ロー・マテリアル」, 「時計塔の明かり」は 19 世紀ロンドンの暗部を暴き、シャン・F・ブロックが指摘するように、当時のロンドンに関する社会史として永遠不滅の価値を有していると言えよう。

第3節 「理想」とは、流れ星のごときもの

ギッシングはまた上流階級の人間をも描き、ブロックの言う、「この上なく陰鬱だが、自分ではそれをまったく意識していないユーモア作家」という特質を示している。

『人間がらくた文庫』のうちの「判事と悪漢」(“The Justice and the Vagabond”)の主人公ディック・ラトランド氏(Mr Dick Rutland)は,⁷ 裕福な家庭に生まれ、地方の名門家庭出身の女性と結婚し、ある町の町長を務め、治安判事を兼務し、はた目には何一つ不自由な生活を送っているかのようだった。しかし実際には、「(ラトランド氏は) 日々の家庭の営みばかりでなく、娘たちの教育に関してほとんど口出しできなかった。夫に関して、ラトランド夫人

は、彼が地方社会の中での彼の名声を保つ努力さえしてくればそれで満足だった」(21)という一節が示すように、彼は夫人の尻に敷かれ、鬱々とした欲求不満の日々を過ごしていた。そんなある日、ラトランド氏は、ある暴行事件の裁判に出廷したところ、被告の男がたまたま彼の昔の級友ヘンリー・グディーヴ(Henry Goodeve)だと分かり、保釈金を払って彼を釈放してやった。そればかりか、ラトランド氏はこの悪漢を自宅に招き、食事を御馳走し、学校時代のこと、卒業後のことを語り合った。

グディーヴは16歳で外国航路の貨物船の船乗りになり、いまだ独身で、世界中を旅して回っていた。ラトランド氏はグディーヴの話に引き込まれ、ついには誘惑に耐えきれなくなり、家出をして彼と同じ船に乗って世界の旅に出ることを決意した。その日、ラトランド夫人はたまたま外泊していた。翌日の朝にグディーヴとサザンプトンの港で落ち合うことを約束し、ラトランド氏はその日の晩旅立ちの準備を整え、妻に置き手紙を残した。しかし、ここ数日間体調不良に苦しめられている彼は、興奮も手伝って夕食がノドを通らず、心臓が激しく鼓動し始め、書斎の椅子にうずくまった。夜、召使いが彼の書斎を訪れた時、彼の呼吸が止まっていることに気づいた。翌日、サザンプトンの港で待ちぼうけを食わされたグディーヴは、「畜生、恐れていた通りだ。(中略)あいつの女房が戻って来て、とっつかまったんだ」(37)と悪態をつくのだった。ラトランド氏の哀れな人生が、ブロックの言う「この上なく陰鬱な」ユーモアで語られている。彼がグディーヴの話を聞いて興奮する様は次の通りだ。

‘Ah, you have lived!’ he exclaimed at length, starting up and moving excitedly about the room. ‘It is you who have been the rich man; I, a miserable pauper! The Arabs have a proverb, “Travel is conquest.” You have conquered the world, whilst I have been crouched in my petty corner, playing at life. I go down yonder, and sit in a big chair, and look as wise as an owl, and send poor devils to prison: this is the utmost I have attained to. You have been living among men, working, suffering, enjoying like a man, and every day learning something new. Good God! It maddens me to look back on these thirty years, and contrast my vegetable existence with such a life as yours. [. . .].’ (30)

ロバート・セリグは、ギッシングとブロックの作品の共通点は「敗北」と「欲求不満」を強調していることにあると指摘する。⁸このラトランド氏の敗北感と欲求不満の吐露は読者の心を動かす。ここには、当時のギッシング自身

の、人生が思い通りにならないことに対する欲求不満が表現されているようでもある。ギッシングは最初の結婚に失敗後、彼が理想とする知的なタイプの女性たちからは交際を断られ、1891年2月、再び労働者階級出身の女性と結婚する。しかし、この女性イーディス・アンダーウッドとの結婚生活も最初からうまく行かず、同じ年の12月に子供が生まれるにつれてますます状況は悪化し、ギッシングは1894年10月10日の日記の中で、「私は、イーディスの自己中心的で粗野な性格ゆえに、自分が耐えている惨めさを言葉で表現することができない」(Diary 350)と告白している。⁹「判事と悪漢」が出版されたのは1896年で、ふたりは別居寸前の状態であった。それゆえに、上述の、ラトランド氏の告白は迫真の説得力を持つのであろう。

ギッシングが描いたロンドンの生活階層のうち、もうひとつは彼同様に貧困の中で苦闘する若き知識人、芸術家たちである。『蜘蛛の巣の家』の中の「哀れな紳士」(“A Poor Gentleman”), 『境遇の犠牲者』のうちの「プラトン街のペシミスト」(“The Pessimist of Plato Road”)などがその例で、中でも特に興味深いのが『人間がらくた文庫』の中の「詩人のかばん」(“The Poet’s Portman-teau”)である。¹⁰

22歳の主人公は、デヴォン州の田舎で10ヶ月を費やして詩集の原稿を書き上げた。そしてこの労作をみすばらしい手提げかばんに入れて、出版社巡りのためロンドンに上京した。彼は希望に燃えていた。晩秋の夕暮れ時で、寝られさえすれば良い安宿を探した。ある一軒の宿をノックすると、若い娘が応えた。彼女は愛想が無く、貧相な身なりだったが、美しく聡明そうだった。詩人は部屋に案内され、宿泊費を尋ねると、娘は一瞬躊躇して答えた。詩人は娘に心をそそられ、なんとか会話に引きこもうとしたが、娘は必要最小限のことしか喋らなかった。詩人は、娘に言われたままに、1週間の宿泊費を前払いし、詩集の原稿の入った手提げかばんを部屋に残し、ロンドンの街に夕食のために出かけた。娘は詩人の想像力を強くかき立てた。ウェストミンスターへ向かって歩く道すがら、ロンドンの街の騒々しい「音楽」に合わせて、詩人の心は新たな「韻」と「リズム」を奏でていた。ロンドンに彼を、娘とのロマンスの予感で暖かく迎え入れてくれた。しかし、彼が宿に戻った時、彼を迎えたのは娘ではなく、宿のがさつな女主人で、しかも彼の宿泊のことなど誰からも聞いていないと言う。娘の姿はなく、彼が部屋に残した手提げかばんは見あたらず、宿の主人と警察を巻き込んで大騒動が起きた。実は、娘は宿泊客のひとりで、詩人が街に出ている間に、彼のかばんを持ち逃げしたことが判明した。この事件があつてから8年後、詩人は今や小説家と

して成功し、盗まれたかばんのことは笑い話として語れる身分になっていた。あの詩集の原稿は、たとえ無くならなかったとしても、どこの出版社も手を付けてくれなかっただろうと思うのだった。そんな回想に耽っている時、彼の小説の愛読者だという「ユースタス・グレイ」(Eustace Grey)と名乗る人物から手紙が来た。この人物は、彼の盗まれた詩集の原稿を預かっており、それを返したいので会って欲しいと書いていた。彼は興味をそそられ、会うことを承諾した。そしてこの人物が詩人の家にやって来た時、上流社会に属する貴婦人のように詩人の目には映った。彼女は、彼のかばんを盗んだ娘の当時の境遇から、娘がそれを彼女に手渡したまでの経緯を事細かに語った。娘は放蕩の限りを尽くして文無しになり、衣服を売り払った。それでも借金は支払えず、絵を描いて売って金を得ようとしたが、無駄だった。そんな時、ロンドンの宿屋で詩人と偶然出会い、彼を騙して、彼のかばんを持ち逃げした。しかしかばんの中には金目のものはなく、あったのは詩集の原稿だけだった。娘は、いったんはそれを捨てようとしたが、思い直してその詩集を読んだ。そして娘は大きな感動を受けた。娘は自分の行いを恥じた。その後、更正して真面目に働き、金持ちの男性に見そめられて、彼と結婚した。しかし、娘が人生の中で愛したのはただひとり、それは「詩人」だった。間もなくして娘は亡くなり、死に際して、詩集の原稿を彼に返して欲しいと「ユースタス・グレイ」に託した。果たしてこの「ユースタス・グレイ」と名乗る女性の正体は・・・。

ギッシングの描写からは、ロンドンの街で食事を終えて宿に戻って来た詩人を迎えたのが娘ではなく、がさつな宿屋の女主人であった時の詩人の落胆振りが手に取るように伝わってくる。そしてまた、「ユースタス・グレイ」と詩人の会話からは、「娘はなぜ本当のことを言ってくれなかったのか」という詩人の痛切な思いが伝わってくる。「詩人のかばん」は、ギッシングが彼自身の人生を顧みて、理想は決して実現しないという「悟り」を描いた作品ではないだろうか。詩人と「ユースタス・グレイ」との、かばんを盗んだ娘に関する次のやりとりが、そのことを端的に示しているように思える。

'I do remember your friend's face. And how I wish she could have spoken to me that night!'

'The ideal is never met in life,' she answered softly.

'Put it into your books—which I shall always read.' (91)

「理想とは、流れ星のごとく手の届かないものであることをギッシングは知っていた」とピエール・クステイヤスは指摘する。¹¹ 「詩人のかばん」は届かぬ理想に対する切ない思いを描いて、ロバート・セリグの言う「敗北」と「欲求不満」を強調し、悲哀に満ち、読者の心を動かす。

もうひとつ、敗北と欲求不満を強調し、理想は決して手に届かぬものであることを示した作品として、『境遇の犠牲者』の中の「校長先生の夢」(“The Schoolmaster’s Vision”)がある。¹² ダン氏 (Mr Donne) は大学卒業と同時に結婚し、ブリストル郊外にある、まずまずの評判を得ている学校の校長になった。そして校長としての職務を忠実に果たし、誰の目にも、威厳のある、理想的な校長に見えた。しかし、彼自身は、自分にはもっと適した職業があるのではないかという思いに常につきまといわれていた。単調な仕事に嫌気がさしていたが、3人の子供が生まれ、家庭に束縛され、逃げようにも逃げ出せない状態だった。彼の妻は、堅実で、家庭的な女性だったが、ボートの転覆事故で溺死した。ダン校長は一時的には悲しんだものの、しばらくすると、これで「不釣り合いな結びつき」(130)から解放されたと心の中では喜んだ。妻の死後、40歳を過ぎた彼の独身の姉が子供たちの面倒を見、家事一切を引き受けた。そんな時、ウィリー・アーエージェント (Willie Argent) という男子生徒の母親がダン校長に面会を求めて訪れた。彼女は未亡人で、息子を親戚に預けて学校に通わせ、自分はロンドンで一人暮らしをしながら、勝手気ままな生活を送っていた。ダン校長は彼女的美貌と優美な服装、そして自転車をさっそうとこぐ姿に魅了された。彼女が去ってから、ダン校長は理想の女性像を巡って自問自答を始めた。亡くなった彼の妻のような、堅実だが面白みのない良妻賢母型の女性が良いのか。それともアーエージェント未亡人のように、道徳的には欠陥があるが、美しく、自由奔放な女性が良いのか。そしてダン校長はついに後者の魅力に抗し難くなり、自分の偽善に嫌気がさし、学校を飛び出し、気が付いたら田舎の旅籠にいた。彼はそこに泊まり、寢床で夢を見た。自転車に乗れないはずの自分がさっそうと自転車をこぎ、その後をアーエージェント夫人が自転車で追い、ふたりは山の頂上を目指していた。「頂上に着いたら、君は僕のものになる！」(138)とダン校長は彼女に叫んだ。しかし答えは返って来なかった。彼は恐怖のあまり目を覚ました。再び彼は寝入り、夢を見た。今度は、自分がアーエージェント夫人を自転車で追いかけようとするが、何度も不細工に転び、彼女から笑われた。すると、道端で彼女に向かって「お母さん！」と泣き叫んでいるウィリーらしき子を見かけた。しかし、アーエージェント夫人はその子を無視して走り去って行った。

ダン校長の悪夢はさらに続いた。彼は、校長室にひとりの生徒を呼んで話していた。「結婚は人生の呪いだ。しかも君はきっと間違った女性と結婚する。結婚した後で本当に理想の女性に出会うのだということを考えてもみ給え。これは私自身の経験から語っているのだ」(139-40)。この話を聞いて、生徒は何も言わずに校長室を去った。ダン校長は、ショックと恥ずかしさのあまり、彼の後を追ったが見つからなかった。ダン校長は叫び声を上げて悪夢から目覚め、慌てて学校に戻った。するとそこでは、ダン校長が夢で見たのと同じような事が起きていた。アーエージェント夫人は、ウィリーを親戚に預けたまま、結婚してフランスへ行くことになり、ウィリーは泣いていた。ダン校長は、「良いか、苦しみを経験してこそ男らしい性格は形作られるのだ。この上なく高尚な心の持ち主は、この上なく苦しい試練を乗り越えてきたのだ」(142)と諭し、ウィリーは決意を新たにした。ダン校長も、まるで何事もなかったかのように、いつもの仕事に戻り、卒業式の日、別の生徒に次のようなはなむけの言葉を贈った。

Whatever the path in which Providence directs you, cultivate a reasonable contentment. There is a spirit abroad—a spirit of restlessness, of revolt. Be not misled by it. However dull, however wearisome your appointed task, discharge it thankfully; for, I assure you, there's nothing so wholesome for man as steady and fruitful labour. Do not become the plaything of a restive imagination; always consult your calm reason; always—(144)

「人間にとって、堅実で、実りのある仕事ほど健全なものはない。始末の悪い空想に弄ばれてはならない。常に落ち着いた理性に頼るのだぞ、常に——」。これは、ダン校長が自分自身に向けて発している忠告である。ピエール・クスティヤスは、「(ダン校長は)新しい生活を夢見たが、結局は環境の重みに押し潰される」と述べ、¹³ この作品が、ギッシングの短篇小説集の中でも、『境遇の犠牲者』に収められたことの妥当性を示唆している。確かにダン校長は、理想を追い求めるが手に入れることができず、敗北と欲求不満に苦しめられる境遇の犠牲者である。しかしこれはただ単にペシミスティックな作品ではない。この作品に描かれたダン校長の「夢」は、ひとつはアーエージェント夫人に対する「始末の悪い空想」であり、もうひとつは旅籠で見る「悪夢」であり、そしてもうひとつは、上述の、生徒に対する忠告のうちに見られる、人生に関する健全な「ヴィジョン」である。ギッシングがこの作品のタイトル「校長先生の夢」の「夢」に“vision”という語を当てたのは、この3つの夢の中で

も最後の夢に最も価値を置いたからではないだろうか。そして上述の引用は、2度の結婚に失敗したギッシング自身の体験に基づいて発せられた言葉のようで、大きな説得力を持つ。

ギッシングの短篇小説のうちには、「校長先生の夢」のように、届かぬ理想を描き敗北と欲求不満を強調しているが、それでいて「希望」のトーンを持った作品が数多くある。

第4節 敗北と欲求不満の中の「希望」

前に、ギッシングは19世紀ロンドンの幾つかの生活階層を優れたリアリズムで描いたと述べた。もうひとつ、それに該当する作品で、敗北と欲求不満を強調する一方で、希望のトーンを示すものがある。それは『蜘蛛の巣の家』のうちの「クリストファソン」(“Christopherson”)で、¹⁴ロンドンの片隅でひっそりと暮らす老夫婦の人生ドラマを描いている。

ロンドンで作家生活を送る主人公の「私」が20年前の出来事を回想して語る。「私」がある古本屋で1冊の本を買った時、クリストファソンと名乗る老人から声を掛けられた。その古本は昔この老人が所有していたという。彼はかつては莫大な蔵書を所有していたが、金に窮してその多くを売り、「私」が古本屋で買ったのはそのうちの1冊だった。今でも本は少しは残っているのよかったですらうちに見に来ないかというクリストファソンの誘いに応じて、「私」はついて行き、見せてもらったところ、肝を潰すほど驚いた。「少し」というのに、天井の高さまである書棚に、所狭しと本がぎっしり並べられていた。彼は2度の結婚を経験していた。現在は、20歳年下の2番目の妻とふたり暮らしで、自分は仕事もろくにせず、妻に働かせ、彼女の僅かな稼ぎの中から本を買い漁っていた。それがもとで妻は体調を崩し、ふたりはロンドンを去り、ノーフォークの田舎にある妻の親戚の家を借りて住むことにした。しかし妻は、親戚が夫の莫大な蔵書を置かせてくれるかどうかと心配して、問い合わせの手紙を書いた。その親戚はロンドンに上京して、実際にクリストファソンの蔵書を見てびっくり仰天し、家を貸す申し出を撤回した。妻はショックのあまり病気が悪化し、死の危機に直面した。クリストファソンは初めて自分の非に気づき、「本は売り払うから」(66)という条件で、再度、親戚に家を貸して欲しいと懇願する手紙を書いた。しかしいつまで経っても返事は来ず、彼は「私」の目の前で嗚咽しながら本を次々に窓から投げ捨てるのだった。そして完全に諦めていた時、親戚から「それならば家を貸そ

う」(66)という返事が来て、クリストファソンは喜びに輝いた。そして彼は、妻には内緒で、本は全て売り払うと「私」に告げた。しかし「私」が、「奥さんは、時々読むものがあつた方が嬉しいでしょう」(66)と言うと、彼はしばらく考え込み、箱1個分だけ本を持って行くことを決意した。クリストファソンの人生は確かに敗北と欲求不満で彩られているが、彼と彼の妻の晩年には「希望」の光が差し込んでいることを、次のように暗示してこの物語は終わる。

Before they left London, I saw Mrs. Christopherson—a pale, thin, slightly made woman, who had never been what is called good-looking, but her face, if ever face did so, declared a brave and loyal spirit. She was not joyous, she was not sad; but in her eyes, as I looked at them again and again, I read the profound thankfulness of one to whom fate has granted her soul's desire. (67)

「クリストファソン」が初めて出版されたのは1902年のことである。ギッシングは2度の結婚に失敗した後、1898年、フランス人女性ガブリエル・フルリに出会う。彼女は『三文文士』のフランス語訳出版を申し出た、ギッシングが理想とするタイプの知的女性であった。ギッシングは間もなく彼女と恋仲となり、翌年からパリで彼女と彼女の母親と一緒に暮らし始めた。しかし、当時、ギッシングは肺病を患っており、1902年には療養のためフランス南部の田舎町に移り住み、ここでガブリエルと平穩に暮らし、翌年、46年の人生に幕を閉じた。常に敗北感と欲求不満に苦しめられ、人生の辛酸を舐め尽くした後に手に入れたギッシング自身の平穩が「クリストファソン」には滲み出ているようだ。上記引用の中の「運命が心の底からの望みを叶えてくれた人間の深い感謝の気持ち」とは、この作品を書いた時にギッシング自身が抱いていた感情だったのかもしれない。このことは、前に述べた、「ギッシングは、理想は決して手の届かぬものであることを知っていた」というクステイヤスの指摘と一見矛盾しているようだが、そうではない。クリストファソンもギッシングも多くの理想を諦めざるを得なかったが、その諦めの心境の中で精一杯生き、最終的には平穩と幸福を手に入れることができたのである。

同じ『蜘蛛の巣の家』に収められた「ハンプルビー」(“Humplebee”)は、¹⁵また別の意味で、敗北と欲求不満の中に「希望」のトーンが見える作品である。舞台は、ギッシングの生まれ故郷ウエイクフィールドを思わせる、イングランド北部の工業の町。主人公ハンプルビーは、内気で、引っ込み思案で、学校ではまったく目立たない生徒だった。しかし彼は、同級生で、大会社の社

長の息子レナード・チャドウィック (Leonard Chadwick) が薄い氷の張った湖で遊んでいて、氷が破れ溺死しそうになったところを救出し、一躍ヒーローになった。チャドウィックの父親はハンブルビーに感謝し、彼を自分の会社の事務職員として採用したいと彼の両親に申し出た。しかし、ハンブルビーは「自然」に興味があり、彼の町の博物館で学芸員として働くことを望んだが、父親からあえなく反対された。父親は呉服店を経営しており、ハンブルビーの就職を機に業務拡張に乗り出した。しかし、2年後、父親の店は多額の借金を抱え、チャドウィック氏のもとへ援助依頼に出向いたが、すげなく断られたばかりか、ハンブルビーは仕事がまったくできないので解雇すると告げられた。父親は二重のショックで病気になるし死亡し、息子は給料の安い会社へ変わった。しかしそこで彼は、辛抱して勤めを続けたおかげで、昇給し、メアリーという恋人もできた。ある夏のこと、ハンブルビーは休暇の帰省を終えて、会社のある町へ汽車で戻っていたところ、衝突事故に遭い、腕を骨折した。運悪く、乗客の中で負傷者は彼一人だった。しかし、たまたま、その汽車には、昔彼から溺死するところを救われたチャドウィックの息子が乗り合わせていて、すぐに辻馬車呼んで、最寄りの病院にハンブルビーを運んだ。ふたりは10年振りの再会だった。チャドウィックは友人とふたりでロンドンで事業を営んでおり、決して昔の恩は忘れていない、今勤めている会社の2倍の給料を払うからうちに来ないかとハンブルビーを誘った。ハンブルビーはこの誘いに乗り、それまで勤めていた会社を辞め、恋人メアリーに結婚を申し込み、彼女の父親の承諾も得た。ハンブルビーは今までの苦勞が一気に報われたかのようであった。ロンドンへ発つ前の晩、ハンブルビーはメアリーの家を訪れた。しかし彼を出迎えた彼女の表情は異様だった。そして彼女の父親は、ある詐欺事件を報じる新聞をハンブルビーの目の前にたたきつけた。それによれば、チャドウィックの共同経営者は、取引先を騙して、商品を買った金を着服し、逃亡し、チャドウィックは逮捕されたとのことだった。それに対して、ハンブルビーは、「レナード・チャドウィックは犠牲者者だったのです。決して詐欺師などではありません。(中略)僕は彼を信用します」(87)と答え、メアリーも彼に同調した。そして父親が、「結局は、ハンブルビー君、君は彼を信用したがためにいい仕事を失ったんだ。私は疑わしいと思ったんだ。しかし君は急いでいて、忠告を求めようとしなかった。もしこれが一週間後に起きていたら、警察は君にも手錠を掛けていただろう」(87)と言うと、メアリーは、「だから感謝しなければならないこともあるってわけね」と答えた。そしてこの物語は次のように終わる。

Again Humplebee met her eyes. He saw that she would not forsake him.
He had to begin life over again—that was all. (87)

ここの、「彼はもう1度人生をやり直さなければならなかった。ただそれだけだった」というのは、決して意地悪な皮肉ではない。ギッシングの生涯を振り返って見た時、幾度も作家として挫折と敗北を味わい、2度の結婚にも失敗したが、その度に立ち直り、晩年において作家としての名声を確立し、ガブリエル・フルリとの平穏な幸福を手に入れた。これらの不運を経験する度に、ギッシングは「人生をもう一度やり直さなければならない。ただそれだけだ」と開き直って、頑張り続けたのではないだろうか。「ハンプルビー」が教えるもうひとつの事実は、人間は心の支えなくしては生きて行けないということだ。上述の引用の中でも示されている通り、恋人メアリーの存在が全てを失ったハンプルビーを支えた。

ハンプルビーの恋人と同様の献身的女性を描き、挫折と敗北の中にも希望のトーンを示す別の作品が、『人間がらくた文庫』の最後を飾る「流行遅れ」(“Out of the Fashion”)だ、¹⁶この女性の名前もメアリーである。彼女の夫は、ある大企業の部長に昇格したが会社の期待に応えることができず、上司から解雇を宣告された。夫からその話を聞かされてもメアリーは動揺することなく、明るく振る舞った。そして彼女が、晩方、一家団らんの時奏でる美しいピアノの音色は、夫と子供たちを常に慰め、励ました。一家はロンドンを去り、イングランド北部の町で事業を始めた。3人目の子供が生まれた。不運なことに、夫はこの事業にも失敗し、一家はさらに厳しい窮乏状態に追い込まれた。メアリーは外で働かざるを得なくなり、朝早くから身も心も粉にして働いた。しかし、彼女は、「人間はパンのみによって生きることはできない」(306)と知っており、夜は、夫に心のやすらぎを与えるため優しい声で歌を歌ってやった。4人目の子供が生まれたが、生後間もなくして亡くなった。メアリーはショックで落ち込んだが、すぐに立ち直り、家庭の中に明るさを振りまき続け、残りの子供たちをしっかりと教育した。彼女の苦労は報われ、子供たちは立派に成長し、夫も再就職することができ、一家に安定と平和が訪れた。ギッシングは、結末で、メアリーを次のように描いている。

Wife, housewife, mother—shaken by the harsh years, but strong and peaceful in her perfect womanhood. An old-fashioned figure, out of harmony with the day that rules, and to our so modern eyes perhaps the oddest of the whole series of human odds and

ends. (308)

ギッシングは、メアリーのような家庭の主婦を、現代の風潮にそぐわぬ「流行遅れ」の人物と見なし、「すべての人間がらくた文庫のうちでも、もっともがらくた」と言いながらも、ここにはメアリーに対する彼の賞賛が滲み出ている。

ギッシングはベシミスティックな小説家だと思われがちだが、彼の短篇小説のうちには、敗北と欲求不満を強調しながらも希望のトーンを持った作品が意外に多い。上に述べた作品以外にも、『人間がらくた文庫』のうちの「靈感」(“An Inspiration”), 「年老いたお手伝いさんの勝利」(“An Old Maid’s Triumph”), 『蜘蛛の巣の家』のうちの「資本家」(“A Capitalist”), 『境遇の犠牲者』のうちの「ハンフリー・スネルの運命」(“The Fate of Humphrey Snell”), 「我が町の博学の友」(“Our Learned Fellow-Townsmen”), 『随筆と小説』のうちの「彼ら、すばらしき友」(“Their Pretty Way”)などがその例として挙げられる。ギッシングが今日もなお読み継がれる作家になったのは、これらのように、敗北と欲求不満の中にも希望を見出すことのできる作品を書き、国境を越えて人々に勇気を与え続けたからではないだろうか。

第5節 時代を越え、国を越え、普遍的人間を描く

ピエール・クステイヤスは、ギッシングが彼の短篇小説で見せた優れた技巧を「職人芸」“craftsmanship”と表現した。¹⁷確かにギッシングの短篇小説は、見事な言い回しと巧妙なストーリー展開で、まさに「職人芸」の味わいを見せる。シャン・F・ブロックが言うように、ロンドンの霧の真実味同様、ギッシングの作品の真実味は疑いようがない。そして、ギッシングが描く男性たち、女性たちに、読者は、日常生活の中で、ごく身近に、どこでも出会うことがあるかもしれない。「静まりかえった日」のジョナサン・バードンとジェム・ポロックのように酒に溺れる男たち、「ロー・マテリアル」のミニーのように身を持ち崩して行く女性、「時計塔の明かり」のロバート・フリートウッドのように、虚栄心ゆえに人生を誤る野心家、「判事と悪漢」のディック・ラトランド氏のように、見てくれは申し分ないが、鬱々と欲求不満の毎日を送る上流階級の気取り屋、「詩人のかばん」に出てくる娘のように、ひとつの出会いがきっかけで更正を果たす墮落した若者、「校長先生の夢」のダン校長のように、誘惑をはねのけ、生徒たちの手本になる実直な教育者、「クリスト

ファッション」の老夫婦のように、人知れぬ人生ドラマを演じながら都会の片隅でひっそりと暮らす孤独人たち、「ハンプルビー」の主人公のように、たとえ騙されることがあっても、その辛抱強さと誠実さゆえに救われる善人、「流行遅れ」のメアリーのように、決して表舞台に出ることなく、陰でしっかりと家庭を支える良妻賢母。本当に彼らは、今日でも、われわれの身近にいそうである。

ブロックはまた、ギッシングの作品は19世紀末ロンドンの幾つかの生活階層を描いたものとして永遠不滅の価値があると賞賛した。ブロック自身の作品も、短篇小説集『新兵たち』(*The Awkward Squads*, 1893)、『雑踏の環』(*Ring o' Rushes*, 1896)などは、19世紀の北アイルランド住民の暮らしぶりとして、今日まで続く宗派対立の実態を描き、北アイルランドの社会史資料として永遠不滅の価値を持つ。しかし、ギッシングの短篇小説は、19世紀末ロンドンに関する社会史資料であるだけではなく、時代を越え、国を越え、普遍的な人間を描いたものとして、永遠不滅の価値を有していると言えよう。ロバート・セリグは、ギッシングの短篇小説は、ヴィクトリア朝後期の中でも最高のランクに属し、その多くは「非常に優れている」“very fine” (Selig 112) と評した。極めて単純な賛辞だが、優れた技巧を用いて普遍的人間を描いたギッシングの短篇小説は、確かに“very fine”のひとことに尽きるだろう。

註

- 1 Robert Selig, “Gissing and Shan F. Bullock: The First Reference in the Chicago Press to Gissing’s Chicago Fiction and Adventure,” *Gissing Journal* 28.4 (1992): 1–6; “The Critical Response to Gissing and Commentary about him in the *Chicago Evening Post*,” *Gissing Journal* 30.1 (1994): 26–37, 30.2 (1994): 15–22.
- 2 Shan F. Bullock, “Shan F. Bullock Estimates Art of Late George Gissing [. . .]” *Chicago Evening Post* (16 January 1904) 5.
- 3 *National Review* 22 (1893): 558–67. George Gissing, *Human Odds and Ends* (London: Sidgwick, 1911) 92–110. 以下、ギッシングの短篇小説の初出に関しては Michael Collie, *George Gissing: A Bibliographical Study* を参照した。
- 4 Pierre Coustillas, ed., introduction, *The Day of Silence and Other Stories* by George Gissing (London: Everyman, 1993) xviii.
- 5 *Sketch* 11 (16 October 1895) 652. *Human Odds and Ends*, 183–90.
- 6 *English Illustrated Magazine* 16 (1897): 432–39. George Gissing, *A Victim of Circumstances and Other Stories* (London: Constable, 1927) 107–23.
- 7 *English Illustrated Magazine* 15 (1896): 261–67. *Human Odds and Ends*, 20–36.

- 8 Selig, "Gissing and Shan F. Bullock," 5.
- 9 Selig, *George Gissing* 15 に引用あり。
- 10 *English Illustrated Magazine* 12 (1895): 3-10. *Human Odds and Ends*, 74-91.
- 11 Coustillas, introduction, xx.
- 12 *English Illustrated Magazine* 15 (1896): 487-95. *A Victim of Circumstances and Other Stories*, 127-44.
- 13 Pierre Coustillas, introduction, *George Gissing, A Freak of Nature or Mr. Brogden, City Clerk* (Edinburgh: Tragara, 1990) 16.
- 14 *Illustrated London News* 121 (20 September 1902) 419-20. George Gissing, *The House of Cobwebs*, with an introduction by Thomas Seccombe (Edinburgh: Constable, 1931) 47-67.
- 15 *Anglo-Saxon Review* 4 (1900): 7-18. *The House of Cobwebs*, 68-87.
- 16 *Sketch* 13 (18 March 1896) 336. *Human Odds and Ends*, 303-08.
- 17 Coustillas, *The Day of Silence and Other Stories*, xx.

(八幡雅彦)